

令和 3 年 5 月 6 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02619

研究課題名(和文) 近世ドイツの文学・伝承・画像資料におけるHeilbad(湯治場)表象の研究

研究課題名(英文) Study of "Heilbad"(health spa) images in early modern German literature, folklore, and pictorial sources

研究代表者

吉田 孝夫(Yoshida, Takao)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：40340426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：地底から湧出する鉱泉によって病氣治療を行う湯治場は、近世ドイツにおいて、西欧古来の霊的な医学・自然観と、近代の自然科学・資本主義・リゾート開発とが拮抗する独特の空間を成している。中世末の聖人伝、近世の奇譚集、16世紀のTh・ムルナー、17世紀のA・キルヒャー、グリンメルスハウゼンなどを主たる素材として、湯治場ないし温泉をめぐる近世ドイツ人の観念世界を通時的に概観し、近世特有の自然・宇宙観がもつ射程を考察することを目指した。その自然観には単なる物質性を越えた、独特な霊性の意識が見られ、また湯の源泉への言及は、個人・人間・歴史そのものの根源への意識を呼び覚ます仕掛けとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパにおいては中世のペストの流行後に温泉文化が途絶えた、という通説が今なお世間に残っているが、それに対してドイツ研究の立場から修正を試み、近世もしくはルネサンス以後の野外の温泉文化の存在を明らかにした。またいわゆる魔女迫害の研究が独り歩きしている近世ヨーロッパ研究に対して、温泉の観点から時代特有の自然観を分析した。さらにこの研究は、ドイツと同じく長い温泉文化をもつ日本にとっても、社会の卑賤観(身分差別)と宗教的供養の関係、あるいは仏教民俗学的な世界観の観点、あるいは谷崎潤一郎『吉野葛』にも見られる、根源への意識としての温泉表象などとも有意義に共鳴し合うと思われる。

研究成果の概要(英文)：In early modern Germany, the hot springs that treat illnesses with mineral springs form a unique space of discourse where ancient Western spiritual medicine and views of nature compete with modern natural science, capitalism, and resort development. An attempt was here made to give a chronological overview of the ideological world of early modern Germans over hot springs.

The main materials are the Hagiography of the end of the Middle Ages, the collections of early modern German miracle legends, Th. Murner in the 16th century, A. Kircher and Grimmelshausen in the 17th century. We aimed to give an overview and consider the range of the view of nature and space peculiar to the early modern period. The view of nature shows a unique spiritual consciousness that goes beyond mere materiality, and the reference to the source of hot water is a mechanism to awaken the consciousness of the origin of individuals, human beings, and history itself.

研究分野：独文学

キーワード：近世 温泉 湯治 ルネサンス ムルナー グリンメルスハウゼン 温泉誌

1. 研究開始当初の背景

近世ドイツ文学を代表する作品であり、近世ヨーロッパの精神史を論ずる上で不可欠の言語資料であるグリム兄弟の『ジププリチムス』(邦訳題『阿呆物語』)は、作品後半におけるいくつかの要所において、「鉄鉱泉」を登場させている。ドイツ南西部とスイス北東部におけるこの「湯治場」への言及は、第五巻における地底世界の王との対話場面に示されたルネサンス的・新プラトン主義的宇宙観と、他方、近代の自然開発ならびに初期資本主義経済の潮流との、厳しい緊張関係を表現している。

中世キリスト教的な価値観の呪縛から次第に解放され、近代の「世俗化」への流れが萌芽的に見え始める近世、すなわち15世紀末から18世紀初頭にかけての時代は、H・ブルーメンベルクの名著『近代の正統性』にも示されるとおり、現世における種々の珍事・不可思議への「好奇心」(curiositas)を肯定し、その精神性に基づく多彩な活動を開花させた。それは例えば16世紀プラハのルドルフ二世による「奇跡の部屋」(Wunderkammer)にも顕著に現われたものだが、言語資料としては、「奇譚集」ないし「予兆物語集」の名で総称される、非日常的な出来事を羅列的に記述した書物が各地で陸続と著された。先に行った基盤研究(C)「近世ドイツ奇譚集の説話学・民衆文化論的研究」(平成25年度～平成28年度、課題番号25370357)では、この膨大な古文獻群を整理・分析する手がかりを求めて、まずはこのジャンルの書籍が叢生した精神史的背景を検討したが、さらに後に判明したことは、先述の小説『ジププリチムス』が、「奇譚集」から実に多くの素材を得ていること、それどころか作品自らを「奇跡の部屋」の蒐集品のごときものと呼んでいて、言わばここには一冊の「奇譚集」としての自己理解さえ観察できることであった。このことは、従来、教養小説かピカレスク小説かというジャンル論に終始することの多かった『ジププリチムス』研究に、新たな展開の可能性を示唆するものである。

仮説的な水準を出るものではないが、おそらく『ジププリチムス』は一種の「温泉小説」と呼べる。温泉とはすなわち奇瑞と異変の場所である。果たせるかな、近世のドイツ語圏は、巷間に広く流布した聖人伝、奇譚集、一枚刷りピラ(Flugblatt)のほか、16世紀のH・ザックス、Th・ムルナー、J・フィッシャルトらによる文学作品のなかで、Heilbadすなわち湯治場のトポスを極めて頻繁に用いており、そこに独特のメッセージが織りこまれたことが明らかになっている。それは16世紀文学をめぐるS・ロライトによる比較的新しい文献(2008年)の功績であるが、特に宗教改革後における教派間の論争的印刷物において、湯治場をめぐる言説と図像が、実に多様なイデオロギーの利用を受けたことがわかる。いわば本研究は、このロライトの16世紀研究をさらに17世紀へ、そして近世全体の精神史的研究へと発展的に進めていこうとするものである。近世(Frühe Neuzeit)は、中世と近代のはざまにあって、なおも研究者の十分な論述を受けているとは言えない過渡期的な時代であるが、まさに中世と近代の双方向を向いた湯治場のトポスは、近世の時代相を適切に捉え、この近現代の淵源とその功罪について批判的に考察するための恰好の素材だと思われる。

2. 研究の目的

この問題領域における原論的な先行研究としては、上記のロライトの著書に加えて、さらにW・ブリュックナー編著『民衆説話と宗教改革』(1974年)があり、宗教改革前夜からの約2世紀間における聖・俗の説話の諸相を詳細にまとめたこの大著の有用性は、今なお汲み尽くされていない。また2009年まで取り組んだ基盤研究(C)「近世ドイツ鉱山・山岳伝説の研究」(課題番号19520230)では、「湯治場」と同じく、中世的信仰と近代的文明との相克する舞台として「鉱山」のトポスを、つまり同じく地底世界に関わるトポスを扱いながら、近世特有の鉱山文化に焦点を定めて研究を進めたわけであるが、その際に蒐集した資料は、本研究において、さらに土と水のエレメントに関わるキリスト教的民間信仰とルネサンス的宇宙観の主題へと連結させ、再度の吟味にかけることができる。

これら従来の自他の研究を踏まえて、本研究は、まず1)17世紀ドイツにおける最重要の言語資料である小説『ジププリチムス』を、湯治場のトポスを手がかりにして分析し、作品全体の構造のなかでそれがどのような位置価値を担っているのかを明らかにする。これは近世の湯治場をめぐる言説の一つの基本形ないし典型例を確認する作業となる。

この導入的作業を終えた後に、近世のさまざまな民衆文化的資料に見える、湯治場への言語的・図像的言及を可能なかぎり拾い上げていくことになるが、そのなかで特筆すべきは、中世末からのヨーロッパで数多く出版された「温泉誌」と呼ばれる著作群である。当時の最先端の自然科学上の知識を、一般の湯治客のために可能なかぎりわかりやすく解説したもので、そこには同時に、その土地の風土や伝承なども記されており、いわば知識人・エリート文化と民衆文化との重層する場所として、民俗学的にもきわめて注目すべきものである。また温泉は、単に身体的な療治を目的とした場所であるだけでなく、そこに独特な精神的価値を担わされている。これにつ

いては、特に宗教改革期のトーマス・ムルナーによる韻文作品『魂の湯治行』(1514年)が重要であり、これを分析することによって、温泉と人間の罪・穢れへの意識との関わりを問うことができる。

以上のような作業のもとに、近世民衆の日常生活と湯治の実態を叙述しつつ、その背景にある近世ヨーロッパ(ドイツ)に特有の自然観と宇宙観を明らかにすること、そしてその発展として、同様に奥深い温泉文化をもつ日本との有意義な比較対照を目指すことが目的である。

3. 研究の方法

近世ドイツ語圏の湯治場の社会史的状況、そして湯治場をめぐる言説と観念を、小説『ジンプリチシムス』をもとに確認する作業を第一に行い、それに続いて2年目以降は、16・17世紀双方にまたがる形で、湯治場の言語・図像資料のリストアップと特筆すべき例の抽出を行う。なお本研究は、日本の開湯伝説・霊泉伝説、あるいは文学作品との比較対照をも試み、日本文学研究の手法と洞察にも示唆を求める。

(1) 「湯治場」小説としての『ジンプリチシムス』研究

近世の「湯治場」表象を検討する端緒として、まず17世紀ドイツの重要な小説『ジンプリチシムス』を論じる。この小説は「湯治場」トポスを複数の要所に配しているという点だけでなく、作者グリンメルスハウゼンが、地方の小村の代官として、少数の上層識字者たちと、大多数を成す下層の非識字層との中間的な立場にあり、いわば社会の権力関係を身をもって知る環境にあった点からも重要である。近世の「湯治場」は、富裕層に限定された高級保養地であったのではなく、社会の全階層がさまざまな目的・利害から寄り集まる坩堝のごとき場所であった。作者はそうした時代全体への諷刺的な視線をもち、「湯治場」を社会そのものの一縮図として描き出していると思われる。またテキストには、作者が手にした同時代の種々雑多な著作からの抜き書き、パロディ、あるいは影響がしばしば見られる。いわば作者は、時代の言説と戯れながら小説を書き上げたのであり、単純化を排した注意深い読みが求められる。

(2) ドイツ南西部グリースバッハとスイス北東部バーデンにおける近世湯治場の社会史的検討

グリンメルスハウゼンが直接に関わり、また滞在したとも考えられる二つの温泉場の社会史的状況を、A・マルティン(1906年)、H・プリーグニッツ(1986年)、F・フュアベート(2004年)その他による歴史的・思想的著作をもとにして跡づける。

(3) 「温泉誌」の検討

中世末に、感染症その他の理由から公営浴場が衰退した一方、近世は屋外の湯治場の開発が進み、その医学的効能を解説した一般向けの著作、いわゆる「温泉誌」が数多く著された。例えばリーゼンゲビルグにおけるC・シュヴェンクフェルトのものが知られており、そこには聖書の章句「主は大地から薬を作られた。分別ある人は薬を軽んじたりはしない」(シラ書三八)がしばしば引用されて、新興の温泉科学(Balneologie)と宗教的観念の独特なる融合が見られる。グリンメルスハウゼンによる効能書の受容の度合い、その詳細については、まだ研究者の一致を見ていないが、そこに一石を投じたい。

(4) ムルナー『魂の湯治行』の研究

16世紀文学における「湯治場」表象として、宗教改革期のカトリック者であったトーマス・ムルナーの一般向け宗教書を分析する。韻文テキストと挿絵木版画の組み合わせという作品の構成にも注意する。プロテスタントであった同時代のH・ザックスにも「湯治場」についての頻繁な言及があるが、それとの対比から、ムルナーの教派的主張と「湯治場」表象の独自性を明らかにする。なお、未邦訳であるムルナーの当作品の翻訳と注釈を試みて、すでに訳書のあるS・プラント、H・ザックス、J・フィッシャルトら16世紀ドイツ文学への日本語による接近の道を充実させる。

4. 研究成果

4年間の研究機関のあいだに、4点の「温泉誌」の分析をまとめて論文として公表した。すなわち近代におけるJ・ケルナー、近世におけるムルナー、シュヴェンクフェルト、キュッファーである。それぞれ、従来の研究では詳細な考察が行われたことのない著作群であり、近世研究と温泉学研究の双方の観点において、何がしかの欠落を埋める作業ができたものと信ずる。

そもそもドイツ文学においてHeilbad(湯治場)の研究課題を設定すること自体は、さほど目新しいものではない。ゲーテは、マリーエンバートほかのボヘミアの温泉保養地を愛し、多くの文学作品を産み出しているほか、ジャン・パウルの著名な短編、H・ヘッセの『湯治客』などがよく知られる。しかしそれらの近代作家たちが登場する以前、つまり近代の黎明期をめぐる文学的・民衆文化的研究はなおも端緒についたばかりであり、先駆的な先行研究が散発的に存在するにすぎなかった。本研究は、A・シェーネとH・ブルーメンベルクが主張する近代的「世俗化」の潮流の発端の時代、つまり近世に焦点を定めることによって、従来なされてきた近現代と中世をめぐる重要な諸研究のあいだに立ち、両者の有意義な橋渡しとなることを根本的な動機として

いる。

例えばイエズス会士 A・キルヒャーは、一般には好事家的関心から紹介的にのみ扱われることの多い人物であるが、彼はまさにこの時代の典型的な思想家の一人であり、そして本研究の文脈においてこそ有意義に論じることが可能だと思われる。その自然観と宇宙観には、近代文明の自然搾取的なスタンスとは異なる、母なる自然の智への畏怖と憧れをとどめており、近世の一つの典型例として、精神的な基礎のもとに堅実に、かつ具体的に論じておく必要がある。キルヒャーについては、研究最終年度に公表した、17 世紀のキュッファーによる「温泉誌」を考察した論文で言及し、霊と物質との混交する近世特有の自然観を叙述した。

またそもそも湯治場という舞台は、病と苦の存在を前提としている。三十年戦争を背景とする小説『ジンプリチシムス』も、やはり身体と精神双方の「病」のイメージに満ちあふれているのだが、この湯浴みと飲泉による治療の場所は、われわれ近現代の日本人にも親しいトピック、すなわち健康と清潔感覚、医療と科学、信仰と迷信、文明とリゾート、自然搾取と資本主義といった諸問題に深く関わる。川村湊『温泉文学論』(2007 年)は、魂と物質、霊魂と身体が融合する「奇蹟」の場所として温泉場を描いた日本の近代小説群を紹介しているが、本研究は、日本文学におけるそうした近代作家たちの視座と同時に、他方、日本の古典文学や各地の湯治場に伝わる開湯伝説・霊泉伝説を考察の対象とすることによって、昨今隆盛の温泉・健康産業の歴史的淵源を批判的に見定める立場を模索した。例えば 2018 年度に公表した、ムルナーの宗教的温泉誌をめぐる論文では、日本の卑賤観と罪・穢れの観念に温泉が果たす役割を参照しつつ、近世ドイツにおける温泉の精神的・宗教的意味づけを考えた。

総括的に言えば、近世ヨーロッパ・ドイツにおける温泉表象には、近代の自然科学の先駆として、物質の客観的な分析を開始する傾向が見られるが、そこにはなおも単なる物質性を超えた、独特な霊性の意識も見られる。そしてこの霊的なものへの意識は、湯を産出する一なる場所、一なる源泉への意識となって表現されるのである 17 世紀の最も重要な小説『阿呆物語』(ジンプリチシムス)において、そうして温泉の源への意識は、個人・人間・歴史そのものの根源への意識を呼び覚ます仕掛けとなっている。そして作者グリンメルスハウゼンの分析を進めていくと、そこには彼特有のアウグスティヌスの・ジャンセニズム的な世界観が深く作用しているように思われるのだが、これについての研究はまた別の枠組みにおいて行わねばならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田孝夫	4. 巻 44
2. 論文標題 ヨハネの湯、山霊の恵み C・シュヴェンクフェルトのシレジア温泉誌（一六〇七年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 希土	6. 最初と最後の頁 60 89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田孝夫	4. 巻 12
2. 論文標題 『小さい魔女』の魅力と民話の語り部としてのプロイスラ（付「娘スザンネさんが語る父プロイスラ」翻訳協力）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MOE	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田孝夫	4. 巻 43
2. 論文標題 湯守イエス Th・ムルナーの温泉誌『霊の湯治』（一五一四年）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 希土	6. 最初と最後の頁 2 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田孝夫	4. 巻 6
2. 論文標題 ホツェンプロッツのプラムケーキ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 欧米言語文化研究	6. 最初と最後の頁 75 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田孝夫	4. 巻 5
2. 論文標題 湯治場と皮膚の幻想 J・ケルナーの温泉誌『ヴィルトバート』（1811年）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 欧米言語文化研究	6. 最初と最後の頁 140 164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 パウル・ザルトーリ、吉田孝夫訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八坂書房	5. 総ページ数 465
3. 書名 鐘の本 ヨーロッパの音と祈りの民俗誌	

1. 著者名 A.ホイスラー、M.コッホ	4. 発行年 2017年
2. 出版社 八坂書房	5. 総ページ数 220, 5
3. 書名 図説ゲルマン英雄伝説	

1. 著者名 東雅夫、京極夏彦、小野不由美、有栖川有栖、山白朝子、恒川光太郎、円城塔、田中康弘、加門七海、夢枕獏、小池真理子、樋口明雄、朱野帰子、安田登、幸田露伴、上田哲農、安部公房、後平澗子、川島秀一、吉田孝夫ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 480
3. 書名 怪談専門誌 幽 VOL. 28	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------